

高橋隆雄先生の思い出

Our Memoires of Professor Emeritus Takao Takahashi, Ph.D.

児玉 正幸, Ph.D.

令和2年(2020年)6月、本学会創立以来の功労者(運営委員兼編集委員)の熊本大学名誉教授・高橋隆雄先生が突如、幽明、界を異にされた。享年71。人生100年が謳われる時世を慮るに、余りにも早い旅立ちである。

1. 高橋隆雄とは何者か

昭和、平成、令和と三代の天皇の世紀を駆け抜けた金無垢の哲学者・高橋隆雄とは、一体何者か。

紛れもなく、ソクラテスの哲学する精神(愛知の精神)を継承する現代稀に見る人物であった。伝統的哲学の問題はもとより、現代の突き付ける諸問題にも目を背けず、果敢に挑むその強靱な哲学する精神に、私は驚嘆の念を覚えるとともに、警咳に接するたびに感涙体験を禁じ得ない一人であった。

2. 令和日本の哲学・倫理学の現状

翻って、高度な物質文明を誇る現代日本の現状を鑑みるに、自称哲学者や公称倫理学者の数は掃いて捨てるほど多い。しかも、その多様性たるや、上は人類文化に貢献する思想的天才の肥やしになるべき宿命を背負った謹厳実直な哲学史研究者から、下は哲学を生活の糧にするだけの只の講壇哲学者や講壇倫理学者の群れ、果ては研究を二の次にして学内政治や学会政治に取りつかれた周旋業専門の哲学屋や倫理屋に至るまで、花盛りである。史上最高の豊かさを謳歌する令和日本においては、埋もれ木のソクラテス的哲学する精神の発掘は、ランプ(スマホ)片手にキャンパスを探し回っても、遇会する機会は

決して多くはあるまい。

3. 巨星墮つ

それが現代日本の偽らざる哲学・倫理学界の実相であればこそ、貪欲な野心を放下し、世のしがらみから身を隔て、超然として哲学する姿勢を保持し続けた高橋隆雄とは、ソクラテスを彷彿とさせる希少価値的隠者であった。彼は大空をキャンパスとするブルーインパルスのように、21世紀日本の晦冥顕著な哲学・倫理学界の夜空に電光一閃、光芒を放って、彼方へ飛び去った。

4. 老師高橋の思い出

その光芒の輝度の詳細については、追悼文を寄稿下さった熊本大学の元同僚(浅井先生、佐藤先生)や国際共同研究の盟友(Dr. Ghotbi, Dr. Komatsu)、『高橋教授 退職記念』誌に譲ることにして、本稿では、高橋先生絡みの国際共同研究に因らざるも参画(2007年~2018)させて頂けた私自身の眼に映じた、老師高橋の実相の一端を記録しておきたい。

4-1 老師との邂逅

私と老師との馴れ初めは2004年に遡る。仲介者は熊本大学の嵯峨忠教授であった。当時、文部科学省在外研究から帰国した私は、生殖医療倫理の研究に没頭していた。その頃、神戸市の大谷レディースクリニック(当時は大谷産婦人科)院長・大谷徹郎医師から仕事上のメールを頂戴したのを機縁に、私は研究対象を着床前遺伝子診断(PGD:2017年以降は

PGTに名称変更)の臨床適用を巡る倫理研究に照準を絞っていた。このPGDこそ、私と老師を取り持つライフワークとなった。

2000年代初頭より、私の本務校の所在地・鹿児島は、デュシェンヌ型筋ジストロフィー(DMD)患者に対する本邦初の産み分け治療目的のPGD臨床適用の是非を巡る国民的大論争が沸騰していた。「命の選別」「障がい者差別」と糾弾する関係患者団体の声を背景に、日産婦学会は2002年2月、鹿児島大学医学部(永田行博教授)の申請を却下した。2004年には、2002年に却下された産み分けのPGDに代わって、着床前単一遺伝子疾患検査目的のPGD(PGT-M)の臨床適用が慶応大学医学部に対して承認される一方で、「無申請のPGD実施」を公表した大谷医師は日産婦学会から除名され、法廷闘争(「PGD権利確認訴訟」)が開始された年であった。私が老師からご厚誼をかたじけのうしたのは、PGD論争がヒートアップする2004年であった。

4-2 老師の人となり

初見の老師の第一印象は堂々たる押し出しの容貌魁偉の人物であった。しかしながら、そうした外見とは裏腹に、その全身から滲み出る包容力に私は瞬く間に包み込まれてしまった。自然体で物静かに語る老師の優しい人柄を反映する語り口と対坐する者を圧倒する豊饒な知識、何よりも哲学する真摯な姿勢にたちまち魅了されてしまったのである。以来、2020年6月、不慮の往生を遂げるまでの20年近くを、私は老師に近似する幸運に恵まれた。

4-3 老師の社会貢献

老師最大の社会貢献は大学院門下生の育成はもとより、各種国際共同研究であろう。私もそうした国際共同研究にご縁を得て、参画(2007年~2018)させて頂けたのは僥倖であった。各種meeting、congressの中から、とりわけ印象深い会合を3点だけ列記し

ておきたい。

1. 2007~2018 : The Kumamoto University Bioethics Roundtable 開催
2. 2000~現在に至る : The Asian Bioethics Conference。2007年、国際共同研究の盟友・Dr. Darryl Macer, Ph.D. (Cantab), Hon.D., M.P.H.—Chair, Accredited Universities of Sovereign Nations & President, American University of Sovereign Nations, USA—と The 8th Asian Bioethics Conference 共同開催
3. 2012~2017 : Intensive Lectures on Bioethics for HIGO Program Student and Others 実施

(*HIGO【Health Life Science : Interdisciplinary and Glocal Oriented】プログラム : 「グローバルな健康生命科学パイオニアとしてのリーダー」を養成する熊本大学医学部の大学院教育プログラムで、文科省の博士課程教育リーディングプログラム「複合領域(生命健康)」採択課題)

老師はHIGOプログラム人文社会科学部門の責任者として重責を全うする過程で、私も関与させて頂く幸運に恵まれた。

七大陸出身の生命倫理研究者が一堂に会する国際共同研究の中心人物として、陣頭指揮を執る老師の指揮能力の高さ、業務を着実に遂行するバイタリティ、高度な企画能力、何よりもBritish EnglishやAmerican English、Aussie Englishはもとより、Hinglish、Singlish、Manglish、Japanglish等々が飛び交う国際色豊かな会場を仕切る老師の達者な英会話能力をつぶさに目の当たりにするができた。

4-4 濃密な12年間のご厚誼に深謝しご冥福を祈念

老師晩年の国際共同研究に奇しくも参画させて頂けた12年間(2007年~2018)は、実に楽しくかつ生産性の高い時期であった。その老師はもはやいない。秀吉の辞世の句を振れば、「露と落ち 露と消えにし 我が身かな 熊曾のことは 夢のまた夢」の心境である。

老師と濃密な時間を過ごすことのできた 12 年間を想起しながら、深甚の感謝の念をご霊前に捧げ、ご冥福を祈る次第である。

なお、国際共同研究の成果は国内外の各電子ジャーナルに既に公表されているので、本稿では敢えて再録はしない。ご関心のある向きは、各自お調べ願う次第である。

(こだま まさゆき 国立大学法人・鹿屋体育大学
名誉教授)